

人間の宿命を追って胸せまる感動！撮影実に一年！

超大作 カラー作品

昭和四十九年度 芸術祭参加作品

砂の器

すな うつわ

原作＝松本清張／監督＝野村芳太郎／脚本＝橋本 忍・山田洋次
撮影＝川又 昂／音楽監督＝芥川也寸志／作曲＝菅野光亮／製作＝橋本 忍・佐藤正之・三嶋与四治

丹波哲郎・加藤 剛
森田健作・島田陽子・山口果林／加藤 嘉・緒形 拳
佐分利 信・渥美 清 東京交響楽団



松竹・橋本プロ(第一回)提携作品





超大作 (カラー作品)

砂の器

■スタッフ

提 携……………松竹株式会社
橋本プロダクション
(第一回作品)

製作協力……………シナノ企画

製 作……………橋本忍

”……………佐藤正之

”……………三嶋与四治

製作補……………杉崎重美

企 画……………川鍋兼男

原 作……………松本清張
(光文社・新潮社刊)

脚 本……………橋本忍

”……………山田洋次

監 督……………野村芳太郎

音楽監督……………芥川也寸志

作 曲……………菅野光亮

特別出演……………東京交響楽団

撮 影……………川又昂

■キャスト

今西栄太郎……………丹波哲郎

吉村 正……………森田健作

和賀 英良……………加藤 剛

本浦 秀夫……………春田 和秀

本浦千代吉……………加藤 嘉

高木理恵子……………島田 陽子

田所佐知子……………山口果林

田所重喜……………佐分利信

三木 謙一……………緒形 拳

三木彰吉……………松山 省二

伊勢ひかり……………渥美 清

◆解説

「砂の器」の映画化が企画され、脚本の第一稿が出来てから十四年の歳月が流れた。その間、何回となく噂に上り、実現に近づきながら、なぜかその都度挫折した。

日本の推理文学に独自の境地を拓いた松本清張の初期作品の中で、最高峰に位置する長篇傑作である「砂の器」は、後から発表された清張ものが続々映画化されるにも拘わらず、登攀(はん)を拒む処女峰のごとく、「幻の企画」として雲上にそびえ立つ観があった。

しかし十四年前はじめてこの不踏峰に挑んだスタッフ・橋本忍・山田洋次脚本、野村芳太郎監督によって「砂の器」製作が遂に決定した。

慎重な計画と周到な準備に半年を費し、本年二月十九日本州最北端の青森県竜飛岬で感激のクランクインを果たした。一年がかりの撮影開始である。

長篇原作の緻密な内容と地域的な拡がりに省略を許さない推理の糸がからむ興味津々の物語を徹底的に分析し、映画的に練り上げた名脚本によって、監督は「張込み」「影の車」をはじめ清張文学演出の第一人者野村芳太郎。撮影は野村演出には欠かせない名手川又昂。

音楽監督に芥川也寸志が当り、特に後半の全篇に流れる協奏曲「オーケストラとピアノのための『宿命』」は菅野光亮が新たに作曲し、東京交響楽団フルメンバー(百余名)の演奏という圧感である。

撮影は厳冬の津軽海峡、信州路の春、深緑の北関東、山陰の盛夏、そして秋の紅葉まで日本列島の四季を縦断して、追う者―追われる者のスピーディーな推理とサスペンス、ダイナミックな音楽、そして人間の宿命を浮き彫りする重厚な画調が象徴的なまでに哀しく美しい。

物語は、迷宮入りと思われた殺人事件を捜査する二人の刑事が、東奔西走苦心さんたんの末その犯人に肉薄した時、いま正に栄光の階段を上りつめようとする天才音楽家の数奇な生い立ち、暗い宿命を負った秘密につき当る。

宿命とは人がこの世に生れ出て自分自身の責任に帰さない運命(さだめ)である。

天才はそのため罪を犯し、華やかな脚光を浴びつつ、得意の絶頂で劇的な破局を迎える。

法の名においてこの男を裁くことは出来よう。しかし命の恩人すら殺害しなければならぬ宿命の悲しさ、深さ、強さ、おそろしさに誰もが共通の傷みを覚えるであろう。

その天才音楽家と賀に加藤剛、二人の刑事に丹波哲郎、森田健作を配し、和賀を取巻く二人の女に島田陽子、山口果林、その他の主要キャストに緒形拳、加藤嘉、佐分利信、渥美清と適役を揃えている。

なお後半は演奏会場、警視庁の捜査会議及び回想シーンが同時進行する野心的な技法が採用され、野村監督は「後半のすべてが長いワンカットと考えている」と満々たる意欲に燃えている。

(上映時間二時間二十五分)

